

## 〈アール・ブリュット〉の初期構想

—1940年代半ば、ジャン・デュビュッフェの芸術理念

小寺里枝 (京都大学)

---

本発表は、20世紀のフランス画家ジャン・デュビュッフェ (Jean Dubuffet, 1901~1985) の、1940年代における芸術理念を明らかにすることで、彼によって当時生みだされた語〈アール・ブリュット〉の初期構想を再構築しようとするものである。

近年、美術のみならず幅広い関心を集める〈アール・ブリュット〉の語は、正規の美術教育を受けたことのない人々—それも何らかの精神疾患や、知的障害をともなう人—による制作物を指し示す語として定着している。このような状況を生み出した背景のひとつとして、1970年以降、〈アール・ブリュット〉の英訳として生みだされた〈アウトサイダー・アート〉(1972年、Roger Cardinalによる)の語が世界中に広まったことが挙げられよう。この英訳語が指し示すのは文字どおり、西洋の直線的な美術史の流れ、美術的環境の“外部”にて制作された造形物である。しかしながら、フランス語で「芸術」を意味する‘アール art’に、「事物の原初的、粗製の状態」を表す形容詞‘ブリュット brut’を組み合わせた〈アール・ブリュット〉の語そのものには、“外部/周縁性”といったニュアンスはどこにもない。後年デュビュッフェ自身が、語の受容に関して「大きな問題がある」(1976年、インタビューに際して)と述べたように、そもそも誕生時の〈アール・ブリュット〉とは、造形物の制作者や、“内部/外部”といった諸要素を問題として生みだされた名称ではなかった。それは、当時本格的な芸術活動を開始したばかりのデュビュッフェ自身が、芸術家として体現すべき造形表現の理念を端的にあらわす語であったのである。

これまでデュビュッフェの芸術理念は、〈アール・ブリュット〉の語とともに、19世紀以降の西洋近代芸術を特徴づける“外部への視点”の極北、という文脈において語られてきた。そこではおのずと“奇抜・異様”といった視点が強調され、デュビュッフェ自身がダダイスムやシュルレアリスムといった美術運動の延長線上、“前衛の極北”と見なされることも多い。これに対して発表者は、これら20世紀前半の美術運動と、デュビュッフェとが、根本的に理念・思考を異にすると主張する。

発表においては、1940年代半ばのパリにおける文化・芸術をめぐる様相を踏まえたうえで、デュビュッフェによる造形実践・書簡等の一次資料を参照し、当時〈アール・ブリュット〉の語に象徴されたデュビュッフェの芸術理念を浮かび上がらせたい。これにより、「20世紀フランス美術を代表する画家のひとり」とされつつも、これまで包括的な検討がなされて来なかったデュビュッフェの活動の一端を明らかにするとともに、現代において〈アール・ブリュット〉の語が、より豊潤な意味において理解されることに寄与したい。